

## 注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

### 【タイトル】

ISS Accelerator

### 【作者名】

ラヴィエンテ改

### 【あらすじ】

何の目新しさもないテンプレな転生。その、はずだった——物語の根幹にすら深く関わる主人公とその『家族』の学園生活が幕を上げる。

\* タイトルは変わっていますがにじファンよりの転載です。

## プロローグ

私(わたくし)、鈴科(すずしな)通行(みちゆき)は転生者である。  
………… そんな可哀想なものを見る日はやめてくださいマジ  
で。

大学の研究室で機械を組み立ててる最中に「」で配線を間違えた  
のや、ショートして破裂。破片が頸動脈に突き刺さり即死した。

んで、神に出会い転生。ふざけてハッキングしたパソコンが某天災の  
ものだと知った時、「」は「」の世界なのだと気づいた。

その時は本気で社会的あほんを覚悟したが

「あの、すいません束さん。もう一回言つてもらつても？」

「君優秀だし白いし、ウサギつながりで束さんの助手になつてもらつ  
！」とにするよ！

「明らかに後半の理由が本命ですよね！ 人のコンプレックスを抉つ  
て楽しいんですかア!?」

「うん…」

「清々しい顔で言い切られたア！ この人どうだろ絶対！」

みたいなノリで助手になつて、お約束とばかりに「」を起動。

晴れて「」学園に入学させられた。スピードバカの専用機とチー

トな体を持つて。

\*

\*

\*

氣まずい。猛烈に氣まずい。

織斑一夏よりむしろいつも注意が向いてる。由いからか？由いからなのか？

ちっこくしょりあのクソ神、こんな目立つ姿にしゃがって。今度会つたらどうひっくりれよう——

スパアン！

「ぶつ！」

「考え」とはい一度胸だな。お前の番だ

「すいませんでした」

そういうえば今は自己紹介の真っ最中だった前を見れば山田先生が涙目だ。罪悪感ばねえ。

しかしさすが『元』ブリュンヒル『』。頭をかち割られるかと思つた。

「…………一人目の男性操縦者の鈴科通行でエス。好きなものは睡眠とコーヒー。嫌いなものは特にないんですけどモヤシだのウサギだの言つた人には条件反射で拳が飛ぶんで注意してくださいア」

これはギャグでなくマジな話である。東さん以外からこう呼ばれるとガチで無意識の中に右ストレートが飛ぶ。

『かっこいい！』

『無氣力なところもいいわね！』

『華奢なアルビノ美少年ハアハア』

『ああー、その赤い瞳で震むように見て！罵って！』

『一夏通行……………アリね！』

……………分かつていた。分かつていたけどこれはひどい。

(せめて腐った妄想は本人の前では自重して欲しいんだが)

早くも頭痛薬と胃薬が恋しくなってきた。市販の奴には耐性が出来効かないんだよな……………ははは。

こうして、俺の前世から通算7回目の、前途多難な学園生活がスタートしたのであった。

\*

\*

\*

休み時間。机に突っ伏してダレていると、肩を叩かれた。

顔を上げると、原作主人公織斑一夏くんがいた。

「えっと、鈴科？だっけ。これからよろしくな！」

おお、笑顔が光り輝いている……………

「…………… よりしへか。名前でも名字でも呼びやすい方で呼んでくれ

「じゃあ鈴科で。俺のことは一夏でいいぜ」

がつちりと握手をかわした。友達一人目ゲット。しばらくラボにこもってたから「ミュ障になつてないか心配だったが、大丈夫らしい。

そういうじでいる内に一夏は篠さん引きずられていつてしまつた。ああいうことをするから鈍感になるんだと思つ。

密かに一夏にホールを送りつつ、再び突つ伏して心地よい眠りの海に沈むことにした。

## 授業にて

「……………眠イ」

授業の感想である。なにせずっと束さんのところで徹底的にじいかれたのだ。この程度は身体に染み込んでいる。

山田先生が授業を進めていく一人だけ青ざめている人間がいた。いつもでもなく一夏のことだ。

「織斑くん、分からないところはありますか？」

山田先生が一夏に問い合わせる。ある程度予習してればしつかり理解できるとしてもいい授業だ。さすが山田先生。

「えっと、いいですか？」

「はい、分からぬことを教えるために先生はいるのですから」

「うん、素晴らしい。『分からぬ？まあとりあえず次いくよ次！』だった束さんは大違いだ。

「全部分かりません」

「え…………」

「クッ……………！」

や、やばい。生で見ると笑える。

「織斑、入学前の参考書は読んだのか？」

織斑先生が硬直した山田先生の代わりに質問。

「古い電話帳と間違えて捨ててしましました」

バシン!!

いい音したな、そのまま見

ドバシン!

「がふつー！」

氣のせいか出席簿に入った力が強い。割れる、これ以上強くなったらガチで割れる。心の中で（^o^）（^o^）（^o^）ギヤーしてただけなのになにこのブリーフ。

「全く必読と書いてあつただろ？が、あと織斑を笑った以上は理解は完璧だな鈴科？」

「すみません」

「ハイ。山田先生のわかりやすい説明のおかげで」

「そ、そうですか、ありがとうございますー。」

山田先生の表情がぱあつと明るくなつた。一夏の発言のせいでも不安になつていたらしい。罪悪感が.....

「全く.....後で再発行してやるから一週間で覚える。わかつ

たな

「いや、一週間での分厚さはすぐが二

「やれと言つてこる」

ぱねえ、フレッシュヤーぱねえ。

「はー…分かりました」

一時間田が終了して一夏はしつけつけつかと歩み寄ってきた。

「爆笑はひどいだろー。」

「悪イ。電話帳まではまだ我慢できたンだが、それからはもオ無理  
だった…………… プチ、思い出せんな笑えてくるだろオガ」

「悪いと思つてないだろ絶対ー。」

はたから見れば漫才にしか見えないやりとりをしてくると、

「うみつじよゆくへ?」

……… 来たよ来やがったよ来ちゃいましたよの二段活用。

金髪ドリルのお嬢様、イギリス代表候補生、セシリア＝オルコット  
さん。

「え？」

「あン？」

…………俺がチラ見しただけでなんでビクッとしてるんだ!?  
そんなに丑つも悪いか!?

「ひ、ちよつと聞こてますの？お返事は？」

「ああ聞こてるけど何の用だ？」

「右」回じや

「まあ何ですか、そのお返事は？わたくしに口をかけてもらひえるだけ  
でも光榮な」となのですが、それなのに向なんですのその態度は？」

「悪いな、俺たち君が誰か知らないんだ」

「わたくしを知らな」」のセシリヤ・オルコットを？イギリスの代  
表候補生にして入試主席の」」のわたくしを!？」

(いや、俺は知りますけどねH)

でも自信家やがれんだから。

「あのと、質問いいか？」

「あ、何なんですか？高級かつ優しい」」のわたくしが特別に聞いて  
あげましょつ

高級ってなんだ高級って。メロンじゅあるまいし。

「代表候補生って、何？」

クラス全員がこけた。俺は醒めた田で見てやった。

「あつ……あつ……あつ……」

「あ？」

「あなた本氣で言つてますの!?」

「おう知らん」

「……………哀れだな。一夏。本氣で言つてんだとすりゃ抱きしめ  
たくなつちまうぐらい哀れだわア」

「いや哀れってなんだよ哀れって！」

「つか字面から想像しろよ。国家代表IIS操縦者の候補として選出  
される一握りの連中……………で合つてゐるみな？オルコットさん」

「そり、エリートなのですわ！本来ならわたくしのよつな選ばれた人  
間と、クラスを同じになる事すら奇跡……………幸運なのですわ。

その事を理解しない！」

いやねえよ。

「そっか、それはラッキーだな」

「……………馬鹿にしてますの？あなた」

「……………多分こいつのコレは天然でHす。諦めてくださいオル  
【シテセ】」

「お前俺のこと嫌いだろ！」

「ホントいじりがいがあるよなア お前」

「ほらみる遊んでんじゃねえか！」

「私を無視しないでいただけませんこと！」

「あ」

漫才してたら素でセシリ亞の存在が頭から飛んでた。

「大体、あなたHSのこと全然知らないくせに、よくこの学園に入れましたわね。男でHSを操縦できると聞いてましたから、少々期待していたのにがっかりでしたわ。態度も全然なつてないし」

「俺たちに向かを期待されても困るんだが」

狙つてハモつた。

あれ、おかしいな。ほとんど発言していない俺の印象までダウントして  
るだ。

「まあでも？私は優秀ですから？貴方達の様な人間にも優しく教えて  
あげてもよくってヨーヨーESで分からぬ時がありましたら、まあ  
泣いて頼むのでしたら優しく教えてあげてもいいです  
わよ。何しろわたくし、入試の実技試験で只一人、教官を倒したエ  
リートの中のエリートですから！」

「あれなら俺も倒したぜ！」

「えつ…？」

「俺は負けだつたが、すげエな二人とも。元ブリュンヒルデの織斑先  
生に勝つなんてよオ！」

『ええつ！？』

教室が湧いた。うるさい。

「鈴科、お前千冬姉が相手だつたのか!?」

「お前らもそオジヤねエのかよ！」

「いや俺は山田先生だつたぞ！」

知つてゐるけどな。

「ふうん」

ちょうどそこでチャイムが鳴った。

「ぐぐぐ、また後で来ます！逃げないことね！よくつてよ!! フンー！」

そういうセシリアは自分の席に戻った。

(一夏ア。これはあれだ。多分変なプライドとか他人との「ミニマニケーション」の経験とかの欠如とかのせいで間違った方向に高校デビューしちまったンだ。生暖かい目で見守つてやろオゼ)

(だつたら素直に言えばいいのにな)

そして次の授業が始まった。

\*

\*

\*

「ああ、織斑くんに鈴科くん。まだ教室にいたんですね。よかつたです」

俺と一夏が教室にいると山田先生が来た。どうやら俺達に用らしい。

「山田先生、どうしたんですか？」

「えっとですね、一人の寮の部屋が決まりました。申し訳ないんですけど、織斑君は相部屋になつてしまつんです」

そういうて山田先生が俺達に渡したのは部屋番号が書かれたルームキーだった。

「先生、俺の部屋つて決まってなかつたんじゃないでしたつけ？前聞いたら自宅から通勤するつてことでしたけど」

「俺はホテルから通つ手筈になつてましたよねエ？」

「それなんですけど事情が事情なので一時敵に部屋割りを無理矢理変更したらいんです。一人ともそのあたりの話は政府から聞いてますか？」

俺は政府からも狙われてるけどな。スキあらば束さんの居場所を聞き出そうとしてくる。俺も連絡手段もつてただけで、最後にラボから離れてからの行方は分からないつての。

「そう言つわけで政府特権で、とにかく寮に入れるのを最優先したいです。1ヶ月もすれば一人の方も用意できますから、しばらくは我慢してくださいね」

「そうですか、部屋の件はわかりました。なら一旦家に帰つて荷物を用意しないと…………今日はもう帰つていいですか？」

「俺も荷物を取りに戻りたいんですけど」

「ああ、いえ、一人の荷物ならもう」

「私が手配して持つてこさせた…………鈴科、あの荷物の量は何なんだ？」

俺達が後ろを向くとそこには織斑先生がいた。

「織斑先生が俺達の荷物を？」

「そうだ。ありがたく思え」

「あつがとうござります」

「自身は工具とか機材とかだ。あんまり触られたくなかったが、それを言つたら失礼だろ?」

「じゃあ、時間を見て部屋に向かってくださいね。各部屋にはシャワーがありますけど、大浴場もあります。学年ごとに使える時間は違いますけど……こつ、今のところ織斑くんと鈴科くんは使えません」

「えつ? なんですか?」

「…………ホント常識が通用しね? のなオマエ。そん露骨に欲望押し出しちゃンじやね? よ」

「え? え?」

「アホかお前は。まさか同年代の女と一緒に風呂に入りたいのか?」

「お、織斑くん、女子と一緒にお風呂に入りたいんですか!?」

「気まずこと思つがなア」

「いっ、いえ、入りたくないです!」

墓穴掘りやがった。

「ええ? 織斑くん女子に興味がないんですか!? それはそれで問題が

「うん、ちよつとオマエとの付き合いは考え方直す必要がありそだな」

「…………」

その会話を聞いていた女子が

「織斑君って、男にしか興味ないのかな？」

「それはそれで……うん、アリね」

「どっちが攻めでどっちが受けかしい？」

「過去の交友関係を洗つべきね！」

「腐った会話はせめて本人のいないとこひでやつてくれませんか  
ねエエエエエエエエエエ！」